談話室 (海外研究体験記)

イギリスでの研究生活：
海外研究リピータに
なるまで

石 井 真 史

独立行政法人 物質・材料研究機構
〒305-0047 茨城県つくば市千現
1-2-1

(2012年4月15日受理)

Research life in the United Kingdom :
The Origin of a Foreign Research Repeater

Masashi ISHII

National Institute for Materials Science,
1-2-1 Sengen, Tsukuba, Ibaraki 305-0047

(Received April 15, 2012)

1. は じ め に

「海外研究に関して、留学先の決め方、生活の様子や感じたこと、日本との違いなどを、主に大学院生などの読者に参考になるように」との執筆依頼を編集委員会より頂いた。初めての海外研究でイギリスに行ったときを思い出し、自分の備忘録にもなると思いお引き受けした。少し古い話であっても、人付き合いや社会通念にそれほど変化はないだろうが、手前勝手な放談や失敗談が皆様の参考になるだろうか。

2. イギリス生活

2.1 渡英前

私が初めてイギリスで生活を始めたのは2003年9月である。当時は、2001年の9.11の直後とはいえ、まだ「テロとの戦い」がヨーロッパには波及しておらず、1989年の東西ドイツ統一、1993年のEUの発足、米口の雪解けムードの延長で、人の行き来がまだ歓迎されていた。査証は交渉すれば空港ですぐに発行してもらえ、セキュリティチェックも厳しくなかった。プローブ顕微鏡のヘッドを「精密部品だから」という理由で機内に持ち込めた。

当時私は、兵庫県にある大型放射光施設 SPring-8 に所属していた。建設期(～1997年)が過ぎて安定な運用期に入り、仕事が一段落した頃、海外研究先となる University of Manchester Institute Science and Technology (UMIST, 現在は The University of Manchester と統合)の Bruce Hamilton 教授と、ある研究会で知り合った。お互いの仕事に興味を持ち、それが長い付き合いの始まりになった。イギリスの留学先というと Oxford や London が圧倒的に多いのに、なぜ Manchester? と聞かれることは多い。だが、行先から人を選ぶのではなく、人から行先を選べたのは、プラスであったと今でも思っている。

2.2 渡英直後

今考えると、この時が一番辛かった。Manchester はイギリス中部の都市だが、この辺りの英語は、訛がとても強い。大学では皆気を使ってくれるが、街中のイギリス人は容赦なく地元の英語で話しかけてくる。その中で家の探し、電気・ガス・水道の契約は容易ではなかった。当時はインターネットで何でも検索できるという時代ではなかったので、住みやすそうな場所を歩き回り、空き家に出ている看板を頼りに不動産屋をいくつも訪ねたが、安いフラット(日本でいうアパート)が見つかるまでには、街の中心地からかなり離れる必要があった。だが面白いことに、中心地から離れるにつれて不動産屋は皆親切になり、落ち込みかけた気分はむしろ軽くなった。こうして家は見つかったが、社会システムや生活習慣の違いは想像以上に大きく、プリペイドカード式の電気メータが理解できず停電させてしまったり、水回りが悪くトイレを詰まらせたりと、数えきれない失敗をした。そのつど、親切な不動産屋の世話になった。今でこそ人情半分の笑い話だが、当時は自分の不甲斐なさに真剣に悩んだ。

Manchester の雰囲気を感じてもらうために家の近所の Gaskell House (Fig. 1) を紹介しておく。1800年代前半に活躍した女流作家エリザベス・ギaskellは、この家で主な著書を記した。代表作「メアリ・バートン」は当時の Manchester が舞台である¹⁾。現在は隔週の日曜日に家の内部を一般に公開している。

2.3 渡英中

私生活とは無関係に、研究生活は待ったなしに始まる。海外での研究テーマは、分野にもよると思うが、研究室の環境をよく見た上で、自分で開拓する必要があるように思う。既に論文や会議で発表されたテーマは、その研究室の中では大抵もう古い。先方で仕事をする以

Fig. 1. (color online). The Gaskell House in Manchester.

上、何に挑戦したいかははっきりと主張する必要があったし、主張にすれば最大限の協力を約束してくれた。

しかし、約束が実現されるまでには日本とは時間スケールが違い、また場合によっては待たされた挙句にあっさり反故にされることもあった。これは今でも悩みの種である。滞在する国の時間スケール、仕事に対する意識の違いを完全に理解するのは困難だろうが、受け入れることは大切らしい。長期滞在中には必ず何らかの問題が起き、そのときには相手国の慣習を受け入れないと物事は進まない。勿論、いつでも信頼でき、安心して一緒に仕事ができる同僚もいる。国籍に関係なくそうした仲間が見つかった時は、いつでも嬉しい。

ほとんどは Manchester での研究生生活であったが、Darasbury Laboratory や Rutherford Appleton Laboratory, The Newcastle University などイギリス各地に短期ながら滞在して共同研究する機会にも恵まれた。イギリスを離れてフランスに渡り Marseille University で過ごしたこともあった。多くの人と知り合い、一緒に仕事をするのは、研究ばかりではなくヨーロッパの文化に触れる良い機会であった。各地で意気投合した方々とは、今でも親しくさせてもらっている。

海外研究の進め方は人それぞれだが、どの人も健康に

は特に気を付けていただきたい。渡英早々、不注意から研究室で転倒し、目の上を数針縫った。幸い大事には至らなかったが、病院での病状やアレルギーの有無などの説明は、容易ではなかった。最近では、経済状況によって保険制度もよく変わる。一人で赴任される方は精神的な負担も多いと思う。事故・事件に巻き込まれたら尚更である。決して無理することなく、海外での研究を全うされることを願っている。

2.4 帰国後

海外研究を、ひと時の経験やキャリアの1つで終わらせるのも良いかもしれないが、私の場合、その後も Manchester を中心に繰り返し長期の研究生生活を送っている。Hamilton 教授と共通点が多いこともあるが、教授の人柄やご厚意による部分が大さいだろう。いつも気持ちよく迎えていただけることに心から感謝している。心からの友となり長く続く関係を築くことも、海外生活のまとめ方として悪くないだろう。少なくとも、お世話になった滞在先の同僚が日本に来るときは、最大限歓迎してほしいと願っている。

3. ま と め

イギリスで過ごす前は「もう科学大国の仲間入りしている日本にいるのだから、いまさら欧米へ留学して吸収することなど本当にあるのだろうか？」と斜に構えていたが、それは間違いだった。その後、新興国の勢いが増して日本の劣勢が囁かれる状況に至っても、なぜ欧米が高い学問レベルを保っているのだろうか？ 科学が一過性の商品ではなく、知への欲求という人間本来の原動力として認識されているからであろう。科学について国際社会と共通理念を持つため、あるいは日本独自の高い理念を作り出すためには、多くの方が海外研究を経験することが大切ではないだろうか。

文 献

- 1) エリザベス・ギヤスケル:「ギヤスケル全集〈2〉メアリ・バートン—マンチェスター物語」(大阪教育図書, 2009)